

## インドネシア人看護師候補者受入実態調査について（概要）

## 1. 調査時期・対象

（時期） 本年2月2日（火）～2月16日（火）

（対象） 20年度に入国したインドネシア人看護師候補者を受け入れた受入施設  
（全47施設）

理事長・病院長、研修責任者、職員、患者、患者の家族、候補者本人に対して調査票を配布（回答数：36施設551人）

## 2. 調査結果のポイント

（受入の目的）

- 候補者の受入目的は、「将来の外国人受入れのテストケースとして」が約85%。「国際貢献・国際交流のため」、「職場の活性化のため」と回答した割合が約7割。一方で、「看護補助者の人員不足の解消のため」という回答も約6割（P. 2）。

（候補者の就労・研修状況）

- 候補者の業務上の指示（口頭）の理解度は、「日本人職員が平易な言葉でゆっくり話をすれば、何とか実施できる」が約6割。「問題なく実施できている」が約3割。  
一方で「日本人職員が平易な言葉でゆっくり話をしても、業務に一部支障がある」、「ほとんどできない」という回答の合計が約15%（P. 8）。

（候補者のコミュニケーション能力）

- 職員から見た候補者とのコミュニケーションについては、「時々話が通じないときはあるが、ゆっくり話せば概ね伝わる」が約6割。「特に問題なく意思疎通ができる」が約2割（P. 11）。
- 一方、患者から見ると、「特に問題なく意思疎通ができる」、「時々話が通じないときはあるが、ゆっくり話せば概ね伝わる」がそれぞれ約4割（P. 12）。
- 候補者とのコミュニケーションがうまくとれず問題が生じた事例があると回答した割合が、職員との間で約3割。患者やその家族との間で約2割。  
具体的には、職員との間では、「一人勤務時、看護師のリーダーの指示を理解出来ないことがある」、「何でも「はい」と答えるが、指示を理解出来ずに頼んだ仕事をしていない。」、「性急な場面での会話による意思疎通はほぼ困難（単語のみならOK）」など。

患者との間では、「患者やその家族に早口で言われると理解が難しく、看護師が再度聞きに行くことがある」、「話しかけても返事がない、ケアが雑などの苦情があった」など (P. 14)。

(候補者の学習状況)

- 候補者の日本語学習の状況(水準)は、「おおむね出来る」と「よく出来る」を合わせて、「話すこと」は約75%、「聞きとること」は約85%。  
一方、「読み書きすること」は、約6割 (P. 10)。
- 候補者の週当たりの日本語及び国家試験対策の学習時間は、「20～25時間」が約35%、次いで、「5～10時間」、「30時間以上」、「10～15時間」が約1～2割(P. 16)。

(候補者を受け入れたことによる職員への影響)

- 職員において、「候補者を受け入れて良い影響があった」は約6割。「候補者を受け入れて悪い影響があった」は約2割。  
良い影響のうち、「勉強になった」が約8割。「仕事に対する意欲が増した」、「患者や御家族から喜ばれた」が各々約25%、約2割 (P. 20)。  
悪い影響のうち「患者の皆様や御家族から苦情を受けた」、「残業が増えた」、「インシデント・アクシデント事例が増えた」が約2～4割 (P. 20)。

(候補者の感じている課題)

- 候補者が感じている課題は、「看護師の国家試験に向けた学習」、「日本語の読み書き」が約8割。「日本語を聞き取ること」、「患者とのコミュニケーション」が約6割。「日本語を話すこと」、「日本人の看護スタッフとのコミュニケーション」、「高齢な患者への対応」が約5割 (P. 26)。